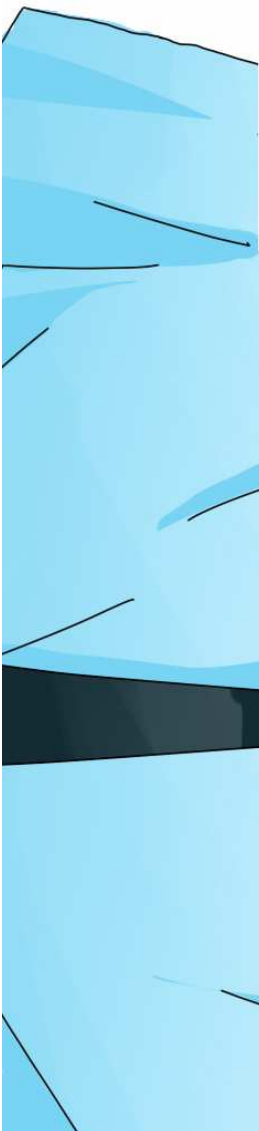


KK FACTORY



死	神	少	女	
高柳 寛		と	俺	+



死神少女と俺+

高柳寛

目次

1. 死神少女と俺
2. 色違いの彼女

1. 死神少女と俺

ある日、部屋の掃除をしていると机の一番下の引き出しから懐かしい小学生時代の卒業文集が出てきた。今が高校二年だから、だいたい五年前の代物だ。

ただ、なんとなくだった。掃除もそっちのけにして俺はその文集をパラパラとめくり始めた。顔がすぐに浮かぶ奴、こんな奴いたっけ、と思うほど影の薄かった奴、いろいろな名前を通り過ぎ、とうとう自分の名前『小見山健太』を見つけた。タイトルは、自分に出来ること。ほう、と昔の自分ながら驚いてしまう。

「昔は真面目だったんだなあ……」

そこには、友達がいてくれたことへの感謝や、今後自分は立派な人間になってみんなのおかげということを証明したいという。そこにはただの無責任な子供のたわごとがそこに並んであった。それに比べて今の俺と来たら、学校帰りには部活もせず大抵一人でゲームセンターに通って、格闘ゲームをひたすらするような根暗少年だ。きつとこの頃の俺が今の俺を見たら、ショックで目を覆いたくなること請け

合いだろう。と、最後の一文が目に残る。

『誰か一人がこの世界を素晴らしいものだと思えたら、きっと他の人も、そうかも
しれないと思えるようになると思います。』

黒歴史決定だ。俺はその文集をゴミ箱へ放りこんだ。この頭のどこにあったんだ、
あんなどっかの歌詞みたいな文字の羅列は。はてさて、俺の方向性が変わってしま
ったのはどのへんだろうかね、と思いつつ俺は掃除を再開するのであった。

この世界に素晴らしいものなんてあるわけがない。その日の終わりに布団に入る
前にゴミ箱に入った文集が目に入り、思わずそんなことが頭に浮かんだ。何も知ら
ないからあんなことが書けるのだ。世の中を知ってしまえば、この世がとてもじゃ
ないが素晴らしいものなんて思えるわけがない。昔の自分に呆れてしまう。学校最
後の文集ということでは何かいいことを書かなきゃということでは必死に振り絞った
結果があればなら理解が出来る。底の浅さが丸分かりだからだ。やっぱり俺は昔から
馬鹿だったんだな。

「……あほらし」

俺は寝ることにした。

*

「人生がゲームとかいう奴がいるけど、ゲームがこんなにつまらないわけがないだろ」

昼休み、友達と昼食をとっているときに、ふとそんなことを呟いてみた。

「なにそれ、哲学？」

一人が呆けた顔でそう答えた。

「いや、一般論」

「そんな一般論聞いたことねえよ」

そりやそうだ。たった今思いついたんだからな。

「小見山、お前、なにか刺激をお求めですか？」

呆けた顔をしていた坪内がそう言う。

「まあ、適度な刺激なら」

「んじゃ、烏丸黒子に告白してこいよ」

「あ？　なんでだよ」

「あー、それは刺激たつぷりだわ」

齊藤が口を挟む。

「あんなもん、噂だろ」

坪内が言った烏丸には下らない逸話があった。本当に下らないので俺は坪内の次の言葉を右から左へと流して聞いていた。

まあ会話の中に出てきたから、ふと烏丸の席に目をやる。ちようどそこには色白で華奢、更に長い黒髪のおかげで日本人形のような姿をした烏丸黒子が一人で小さなお弁当をついついているところだった。周りの人間は食事中に彼女の顔すら見たくないといった感じだ。が、特例もいる。

「烏丸あ、あんだ教室で食べんじゃねえよ！ お前防虫剤臭いんだよ！」

恐らく、日本人形のような風貌にかけたジョークだろう。そういつて突っかかるのはこのクラスの女王様の存在、高居亜紀、とその一味だった。高居は烏丸の椅子に蹴りを入れる。無論、高居にとやかく言う輩はこのクラスにはいない。この高居という女はとても面倒で、小さな問題は大勢の女を味方に引き連れて、ちよつとややこしい問題は、どこぞの学校へ乗り込んで喧嘩ばかりしているという謎な彼氏が出てくるので、皆それを恐れて、なるべく彼女には関わらないようにしている

のだ。

「なんであなたにそんなこと言われたいいけないの？」

烏丸がなんと言ったかここまでははつきりと聞こえなかった。

「てめえ、今なんつった！」

しかし、そう怒鳴る高居を見ると恐らくそのようなことを言ったのだろう。烏丸は度胸がある、というか言いたいことをスパスパ言ってしまう。だからこそ他人に好かれにくく、こうした苛め紛いの行為を受けてしまうのだろう、と俺は思っている。もう少し利口に生きてみれば少しは変わるだろうに。

「じゃあ、こうしてあげる！」

そういつて高居は烏丸の弁当を地面にたたきつけた。

「あはははは！」

そう笑いながら教室を出て行く高居一味。

「ひー、女ってのは怖いな」

「ああ、俺たちの女の子への価値観が著しく変わっちゃまいそうだ」

「烏丸もこういうときに呪い発動すればいいのに」

「確かに！」

呪い、呪いねえ。俺は何も言わずに二人の会話を聞いていた。

「おい、小見山、さっきから黙ってるけど、どうしたよ」

「呪いの効き目はのろい」

「それはないわ……」

坪内と斉藤の冷たい視線を受けながら俺は弁当を片付けた。

さきほど、坪内たちが言っていた、烏丸黒子の呪いの噂を知ったのは高校二年になったときだった。

呪い、というには些か陳腐であり、まあ確かに呪いと言えなくもないという程度のものだ。しかし一部では死神と呼ばれるほどそれは深刻化が進んでいて、詳細をみる一部の人間が校内に広めたものだと思われる。

最初の事件は彼女が中学二年の時、一人の男子生徒に告白されたことによつて火蓋が切つて落とされた。

その頃はまだ死神という別名がなかったこともあり、烏丸黒子は普通の女子生徒として、学校生活を過ごしていた。さらに彼女はスラっとした体、子顔、流れるような美しい黒髪の持ち主であり、一部の男子生徒からは高嶺の花とまで崇められて

いた。そんな彼女に、とうとう勇氣ある一人の男子生徒が告白をしたのだ。

しかし、彼女の答えは「ごめんなさい」だった。

彼女にとって初めての経験だったその告白は、彼女の胸を異常なまでに高鳴らせ、まともな思考を失わせた。そして突発的に脳内から出てきたその言葉を思わず口に出してしまったのだ。おとなしいことで有名であった彼女が、そのまま下校道をずっと走り続けるというほどまでに興奮していた。自宅に帰ると布団に逃げ込み、息を殺した。なんで断ってしまったのだろうか、という思いもあった。明日会ったら、謝ろう、そして今度はこっちからもちゃんと思いを伝えよう。彼女は順調に青春を満喫しようとしていた。

翌日、ある訃報が彼女のクラスに伝えられた。昨日、彼女に想いを告げた男子生徒が不慮の事故で亡くなってしまったという知らせだった。クラスの生徒たちが落胆を見せる中、烏丸黒子はショックのあまりにその場に倒れてしまい、保健室に運ばれた。

その日から、彼女は人と距離を置くようになり、事情を知っている数名の友達も励ますことを辞め、彼女の周りには人がいなくなった。

数週間が経った頃、彼女も少し心の傷が癒え始め、明るさも取り戻し、友人も彼女の元へもどってきた。また前のような日々が始まると彼女は思っていたかもしれない。

「僕はあなたが好きです！」

昼休み、お弁当を食べているときに、一人の男子生徒が彼女にそう言った。しかし、彼女にはその男子から出る言葉に何も感じなかった。まるでふざけていて、真面目さがなかったのだ。彼女はそれでも少しばかりは動揺し、食べていたお弁当に蓋をして、教室を出ようとした。そのとき、目に入ったのは他の男子たちが気味が悪いほど薄ら笑いを彼女に向けていること。そこで彼女は思った。自分は試されているのだ、と。前の一件依頼、男子からの烏丸黒子を見る目が変わっていた。この時、それを実感した。

「黒子、ほつときなよ！」

友達の一人がそう呟いた。

「うるせえ！ 他の女子は黙ってる！ 俺たちはこいつの呪いを確かめてるんだよ！」

呪い、その言葉が純粹に彼女の心に深い傷をつけた。

「やめなさいよ！」

そう彼女の友達が立ち上がり、男子生徒を捕まえようとする。男子生徒もそれはごめん、と逃げる。

「待ちなさい！」

「やだよ！」

そう言つて男子生徒が勢いよく椅子に乗った途端に椅子のバランスが崩れ、そのまま椅子と同時にコンクリートの床に叩きつけられた。

「きゃああああ！」

「せ、先生！ 先生呼んできて！」

頭から血を流す男子生徒を見て、そう叫ぶ女子生徒たち。

「いってえ……」

その男子生徒が頭を抑えながらフラフラと立ち上がる。

「……やっぱり、呪いだ」

そう呟いて、力なく倒れこんだ。担任が駆け込んでくる。烏丸黒子はただ、立ち尽くしてた。

呪い、その言葉が頭からくつついて離れなくなった。

「私は……、呪われてる」

一人でそう呟き、それ以来、彼女はまた一人きりで過ごすようになった。彼女自身も、自分は本当に呪われてしまっているのだ、と信じてしまうようになった。

「死神だって……」

そのことが学校に広まるのもあつという間だった。彼女は一躍有名人となり、皆から視線を浴びることになった。それでも彼女は一日も学校を休むことなく通学を続け、県内でも五本の指に入る高校、つまりは今の高校に進学したのだった。

少しばかり彼女は清清しい気持ちであった。あの学校と離れることで自分の呪いが無くなるような気がした。何より、その高校には同じ中学の人間が少数しかいない。彼女は今までよりは少しでも前向きに生きていけるということに希望を感じていた。

高校に入学し、春、夏、秋、と彼女は順調にその生活を楽しんでいった。笑顔さえ見せ、彼女は女子にも男子にも好感を持たれていた。それでも、どうにも男子には多少なりとも抵抗があり、彼女なりに気にならない程度の距離だけは保っていた。問題は三学期に起きた。

いつもどおり、下校をしようとして廊下を歩いていると一人の男子生徒が彼女の前に立ちはだかった。彼女は少し嫌な感じがしたので、目を合わせないようにして彼の横を通り過ぎようとした。

「逃げないで」

男子生徒を見る、確か名前を武山と云った。

「……なんですか？」

彼女は仕方なく、話しをすることにした。

「僕、武山っていうんだけど、知ってるかな？」

武山は顔を紅潮させながら、しどろもどろでそう尋ねる。彼女は頷くと武山はそっかそっか何度か舌で唇の感想を潤した。

「じ、実は僕、烏丸さんのこと、好きです！」

彼女は思ったとおりだと少し落胆した。それが顔に出てしまったのか、武山は取り繕うようにこう言った。

「か、烏丸さんの噂は聞いたことあるよ。で、でも、僕烏丸さんのことが……」

その顔は一番初めの男子生徒に似ていた。真面目で、真っ直ぐで、相手の笑顔を待つような、そんな顔。でも彼女はもう笑えなかった。

「よかつたら、これ……」

そういつて武山は一通の封筒を取り出した。

「そ、それじゃあ、僕は！ と、突然ごめんね！」

そう言つて彼は走つて下駄箱へと向かつていった。彼女の手元に残された封筒。中には手紙が入つていた。内心は嬉しかった。でも彼女の過去がそれを吹き飛ばした。

家に帰り、手紙を読む、彼の丁寧な字が素敵だった。内容も自分勝手というほどでもない、遠くにいる祖母から手紙をもらったような、そんな優しい感じもした。彼女はその手紙を机の中にしまい。ただ願つた。

「……彼にはなにも起きませんように」

その願いは届かなかつた。

翌日、朝から彼の姿はなく、彼女がそれを不安に思つていと担任が現れた。

「昨日、武山君の家が火事になり、しばらく彼の父親の実家に住むということになったそうだ、あまりに唐突だったので、挨拶はないが……。まあしばらくしたらも

どつてくると思うぞ」

そう簡潔に説明して、普通にホームルームが始まった。

その最中、何人かの生徒が彼女のほうを何度か見た。彼女はそれに気付いたが、気付かないふりをした。

その後の噂によれば、武山なる男子生徒はこの高校に戻ってくることはなく、父親の実家の近くの高校に身を置いているそうだ。

そして、その日以来、彼女は中学時代と同じような毎日が始まった。

必要時以外、なにも言わない。愛想を無くし、話しかけられても冷たく接する。極力人から避けられるように。そして、極力誰も傷つかないように。

*

俺にはその話が信じられなかった。そもそも馬鹿げている。そんなもんで人が死んだり、怪我したり、家を焼いたりするものか。なんなら本当に俺が告白してやろうか、と言ったら斉藤に止められた。

しかし、納得がいかない話である。なぜ、彼女がそんな理不尽な人生を送らねば

ならないのだ。正直、彼女は可愛い。惚れた男子たちの気持ちがわからんでもない。俺にとっては更にそんなミステリー要素が入ればミラクルケミストリーである。友達ならどうなんだろうな。

そんなことを考えながら昼休みが終わるチャイムを聞いていた。

*

烏丸の噂のことなど、頭の隅へと消えた数日後のこと、俺はいつもどおり、学校帰りにゲームセンターへと向かっていた。校門の前でひたすら往復でランニングしている陸上部を横にスイスイと自転車を走らせる。通っているゲーセンがあるのは駅前で、自転車で行くと十分ほどで着く。着いたら裏の駐輪場に自転車を止め、店内に入る。

トップオブザファイターズ。TOF、通称『豆腐』は人気の格闘ゲームである。簡単に説明するとこのゲームのプレイヤーは3種類に分けられる。一つ、根っからのゲームファンであり、昔からシリーズがあるこのゲームをやりつくしていて、ラウンドで選ばれたどんなキャラでも容易に勝利を得てしまう怪物レベルのプレイ

ヤー、俗に上級者。一つ、新参者でも古参者でもなく、ただなんとなく面白いから続けているという、固定のキャラしか使えないが、それでもラスボス程度までは倒せるというプレイヤー、俗にいう中級者。一つ、まあ時間つぶしに格ゲーでもやってみるか、や、このキャラクターエロい！などの理由でちよつと噛んだだけで、大抵は乱入者によってぼっこぼこにいじめられるプレイヤー、俗にいう初心者である。俺はこの中では初心者よりの中級者といったレベルにいる。ただひたすらやれば強くなれるわけでもないのだが、つついこうして足を運び、小銭を投入してしまうのは、中毒症状にも似たようなものである。

この日、俺はいつものように乱入を待ちながらコンピュター相手に戦っていた。こうして適当に遊んでいけば誰かが乱入してくることが多い。その日は第四ステージ目で対戦相手が乱入してきた。この瞬間の胸の高鳴りが癖になる。が、それは絶望へと変わった。相手はランダムでキャラクターを選んだ。そしても見事に強キャラ揃い。バトルは一チーム三人で行われる。第一ラウンド、即死コンボを決められて負け。第二ラウンド、今度は違うタイプのコンボの後、溜まったゲージの技を決められ、負け。第三ラウンドは相手が動かない。こちらから攻撃を仕掛けるもジワジワ減らしたところでカウンターでぼっこぼこにされてストレート負け。

「……」

なんでやねーん、と叫んでしまうところだった。こんな強い奴がこのゲーセンに
いるなんて聞いてないぞ、と思わず台の隙間からどんな相手かを覗いてしまう。長
髪。男で長髪？ よく見てみると同じ高校の女子生徒の制服を着ている。顔をみる
と知った顔がそこにあった。

烏丸黒子、彼女だった。

ええー、と声なき声が出る。

なんで烏丸がこんな似合いもしないゲーセンに、と不思議に思いながら自分の方
の台のモニターを見てみる、烏丸のプレイがこちらでも見られるのだが、その戦
いは俺とはレベルが違った。まさしく上級者だったのだ。試しにもう一度硬貨を
いれ、乱入して戦ってみる。烏丸は再びキャラクターをランダムで選ぶ、しかしさ
つきとは違い、今回は中レベルのキャラクターばかりだ。俺ももうさつきのよう
にあつさりと負けるわけにはいかない。

数分後、俺の自信は見事に消え去り、目の前にはゲームオーバーの文字。こいつ
は、伊達じゃない。

「烏丸あ！」

俺は席を立ち、反対側へといった。

「……何？」

見向きもせずにはステイックを躍らせ、ボタンをリズム良く叩く。せめて、誰に話しかけられているかだけでも確認してほしい。

「……おまえ、なんでこんなに強いんだ？」

「簡単じゃない」

さらりと言う。

「いや、……それにしたって、俺がクラス以外で、ましてやこのゲーセンで烏丸を見たのは初めてだぞ」

「駄菓子屋のおばあちゃん、先月に亡くなって、駄菓子屋も無くなってしまったから。それにたまにやりたくなるの」

駄菓子屋、確かに近くにこういったアーケードを置いてある駄菓子屋があったな。あそこのばあさん、死んだのか。

「別に私の呪いだって思いたいんなら思ってもいいけど……」

さらりと言葉を続ける。自ら自分を追い込んでいるようにも聞こえるが、不思議と彼女にはそれが似合うように聞こえた。

「別に思わないけどな、まさかお前がここまでの腕の持ち主だったとはね……」

「ところで、あなた、誰？」

「……言葉を失う。せめて同じクラスの奴の顔だけは覚えておいてもらいたい。」

「小見山、同じクラスの。俺そんなに存在感ないか？」

「男子はあまり気にしないようにしてるの、ごめんなさい」

「そういうながらボスをあっさり倒すと立ち上がる。」

「まさかとは思うけど……」ちらりと俺の顔を見る。「あなた、呪われないの？」

「滅相も無い」

「そう」

「そうやって鞆を持つ。」

「烏丸！」

「……なに？」

「冷たい目がこちらを見る。」

「ま、また今度、対戦しないか？」

「興味だった。ほんとうにそれだけ。下心なんてこれっぽっちもなかった。」

「……」

しばらくの無言、彼女は俺をじっと見つめると一つ息を吐いた。

「まあ、たまにやりたくなるからそのときにでも
そう呟いて店を出て行った。」

なんだか夢でも見たような気分だった。ゲーセンに烏丸黒子。まさに豚に真珠である。そしてその彼女がかなりのやり手で。うむ。まさに。面白い存在である。

この時であろう。俺が彼女に興味を持ち始め、積極的に話しかけてみようと思いはじめたのは。

「おはよう」

翌日、俺が教室に入ってきた烏丸に声をかけてみると烏丸は呆れた顔をしていた。

「怪我でもしたいの？」

「挨拶くらいなら大丈夫だろ、噂だと」

「まあ……」

少しばかり迷惑そうな顔をして烏丸は席につく。

「おまえ、なにがしたいんだ？」

背後から斉藤に声をかけられる。振り向くと小さく首を横に振って有り得ないと

顔で語っていた。

「別にいいだろ、挨拶くらい」

「まあ、挨拶で犠牲者が出たなんて聞いたことないからな」

「それに俺、烏丸のこと、すげー興味ある」

俺がそういうと斉藤は怪訝そう声で「性的な意味で？」と尋ねてきた。

「馬鹿いうな。人間的好奇心の一つだよ」

「好奇心は猫をも殺すっていうがな」

「俺は猫じゃない。まあ猫だったとしたらもうすでに百回は死んでるしな。それにそんなことを言ったら百万回死んだ猫だっているんだ。好奇心でそんな簡単にくたばってたまるか」

「なんだその無理やり論。相変わらずなことだ」

斉藤が呆れきったところにホームルーム開始のチャイムがなった。

そう、俺は烏丸に興味が湧いてしまった。可愛くて謎な噂持ち、そして格闘ゲームの女王。これはミラクルケミストリーレベルではない。ギョラクテイックケミストリーだ。

そうになったら、まずは第一歩、行動だ。

帰りのホームルームが終わり、俺は席を立った。

「よう、烏丸」

「……なに？」

「一緒に帰ろうぜ！」

すごく明るい笑顔でそう誘ってみる。

「嫌」

「……」

静かな笑顔でそう断られる。人生は甘くはない、ということとを彼女は漢字一文字で教えてくれたのだ。俺はそれに軽く感謝する。しかしここで俺も引けはしない。

「じゃあ、付いていっていい？」

「嫌」

「こっそりと」

「嫌」

「探偵っぽく」

「……嫌」

少しの間があつた。

「マルボロ啜えて、サングラスかけて、眉間にしわ寄せて、探偵っぽく」

「……………」

彼女もその姿を想像しているのか、それともただ単に返事をするのに飽きたのか。

「なんで？」

しばらくして理由を聞かれた。チャンスをつかんだ、と俺は思った。しかし理由を全く考えていなかった。しかし大丈夫だ。流れに身を任せれば自ずと答えが出るはず。

「興味があるから」

「……はあ」

ため息をつかれる。

「別に好きとかじゃないぞ、ただ烏丸に興味があるんだよ」

「どういうこと？」

目を細くして俺を見る。

「烏丸の噂にも興味があるし、あのゲームの腕にも興味がある」

「それで？」

だんだんと周りの視線が気になり始める。それもそうだ。普段周りには誰もいないはずの烏丸の席の前に男子生徒が立っていれば、一体何事かと、もしかしたらまた犠牲者が出るのでは、と自然と注目が集まってしまう。

「よし、おごるぞ！ ファミレス行くぞ！ ファミレス！ すぐそこの！」
そういつて烏丸の鞆を持った。

「……………」

「取って食ったりしない、それよりも烏丸、俺は烏丸と話がしてみたい、いろいろと、な」

烏丸が一度、窓から外を見る。そして再び俺の顔を見ると口元だけ動かした。

「……少しだけなら」

「決まりだ！」

こうして、俺はクラスメイトたちの変な視線に見送られ、教室を烏丸と共に後にした。

少し歩いたところにファミレスがある。俺は自転車を止め、烏丸と共に店内に入った。

「んで、なんで呪いなんだ？」

俺はドリンクバーで烏龍茶をいれ、席にもどると同時にアイスコーヒーを飲む烏丸に尋ねた。

「ずいぶんと、突然ね。夕立みたい」

なんだその例えは、と脳内でツツコミを入れたあとに俺は烏龍茶をストローで吸う。

「知っているでしょ。私の噂、それが全てよ。否定もしない。まあ、肯定もしないけど……」

「んじゃ、もし俺が烏丸に愛の告白をした瞬間になにか痛い目を見るわけか」

「……」

烏丸が無言で、なおかつ上目遣いで俺を見る。いや、睨んでいるのか？ すると彼女はひとつため息をついた。

「あなた、よくそんなに言いたいこと言えるわね」

「……んー、なんだろいな。あんな高校にもそりや一人や二人常識を弁えない馬鹿がいるってことだろ」

「それ、自分のこと？」

「さあな」

そういって俺が笑うと烏丸は少し呆れたように笑った。

「それにしても、なに？ 私の呪いについても調べてレポートでも書いてくれるの？」

随分と態度が変わった。いや、これが彼女の本性なのだろうか。そうだとしたら俺は彼女に一步近づいたことになれたような気がして少しうれしかった。

「まさか！」

「あなた、えっと、小見山君だっけ？」

「そう、小見山健太。君は烏丸黒子」

「それは知ってる。小見山君はさつき探偵がどうか言ってたけど、ミステリーとか好きなの？」

「んー、アドベンチャーゲームならたまにやるけどな。あとたまにドラマも見る程度」

「まさか、この呪いとかいう不確かなものになにかこじつけでもして黒幕でも見つけてくれるの？」

「まさか！」

パート2。彼女の思想は面白い。というかさっきの探偵のくだりをまだ覚えていたのか。

「そんな面倒なことはしないよ。大体そんなものに犯人なんかいるわけがないだろう？　そういうのを求めたがる奴ってのは下心しか持っていないご都合主義者なんだよ」

「なにそれ」

「いや、ただの持論」

「小見山君ってエゴイスト？」

「まさか！」

パート3。なんだか誤解されまくりだった。しかし最初のコンタクトは誰と接してもこんなもんだということを知っていたし、ましてや烏丸とこうしてコンタクトを取れていることだけでも満足だ。

「俺が興味があるのは、烏丸が今後幸せになれるかどうか、ってことさ」

「なにそれ」

烏丸が左手で頬をつきながらぺたんと倒れた。横目で濃い琥珀色に輝く珈琲を見ている。とても画になる光景だった。

「言い方が悪いかもしれないんだけどな」俺は烏龍茶を飲み干す。「これは実験さ」
「……私で、実験をするの？」

さすがに言い方が悪かったかな、と思った。俺もちろん人間だ。言っちゃまずいことを言ったあとの空気くらいは読める。だが、彼女はそれを柔軟に受け止めているのか、そういった気まずい空気は流れる様子はなかった。

「私はこれをイジメだと解釈をしてもいいのかしら？」

「ちよ、待ってくれよ。イジメじゃない。なんていうか、慈善活動？　ただのおせっかい？　いや、個人的興味？」

一番最後のが、もつとも結論だと俺は悟った。

「ドラマであつただろ、いじめられっ子がイケメンたちにプロデュースされて友達作るの、あんな感じだよ」

「小見山君はイケメンじゃないけど？」

「それは承知の上ですよ」

俺は少し不貞腐れるフリを試してみた。

「つまり、小見山君は私をこの呪いというものから助け出してくれる王子様ということ？」

「いや、そこまでは言っていないけど」しかし、大体合っているといえ合っている。

「王子様じゃないけどな」

「そう」

彼女は視線を珈琲に戻し、それにさしてあるストローをくるくると回し始めた。

「ちなみにそのどこに、あなたにメリットがあるの？」

「メリット？」

「そう、メリット、もし小見山君が私をどうにかして助けてくれる、というのなら私はいいけど、あなたにはなにもメリットはないはずよ」

「シャンプーはアジェンス！」

「……？」

こういう無駄なボケはいらないようだった。まあ、そのうち分かってくれるだろう。

「まあ、俺はこの高校生活でなにか楽しいことをしたい。でも楽しいことを一人でしてもなにも楽しくない。一人でただコンピューターと格闘しているよりも誰かと対戦してたほうが楽しいだろ。つまりそんな感じだ」

「要約して」

彼女はまた上目遣いで俺を見た。俺は店の証明を見て少し考えるふりをして。

「……面白そうだから、かな」

そう言つて、再び烏丸を見た。

「……あなた、人としては随分と鬼畜な最低野郎だということはわかったわ。過去になにかトラウマでも抱えてる？」

「まさか！」

パート4。彼女には俺のことを少し知ってもらふ必要があるそうだ。

「本能に従順なだけだよ」

「じゃあ、私の体が標的になる場合もあるわけね」

「……」

敢えて否定はしない。そっちのほうが反応が面白そうだから。

「答えないと全力でここから逃げるわ」

「あー、ごめん！ ごめんなさい！」

そう謝ると彼女は笑った。

「あなた、気持ち悪い人ね」

「まあな！ お互い様だろ？」

ものすごく爽やかな顔で俺はそう言った。彼女は少し目を伏せた、と思わせて窓から外をうかがい、信号が緑から赤に変わったのを確かめて、再び俺の顔を見た。

「一つだけ条件があるの」

少しばかり真面目な顔だった。

「なに？」

「私に好意を持たないで……」

「頑張ってみるよ」

俺にはそうとしか言えなかった。口は悪いことが判明したが、こんな可愛い子と一緒にいれば、つい一時くらいは心が揺らぐときがあったっておかしくはない。人間だもの。

「人間だもの」

「……それで、あなたは私になにをして欲しいの？」

彼女は椅子に座りなおしてそう言った。

「え、えーっと。そうだな」

彼女のその言葉が唐突だったので、言葉がなかなか掴めなかった。

「その前に、ちよつと呪いのことを詳しく聞かせてもらってもいい？」

「……どうぞ。なにが聞きたいのかしら」

「そうだなー、噂だと烏丸に男子生徒が告白したのは全部で三件？」

「イエス」

「そのうち、全員がそれぞれ呪いを受けた」

「イエス」

「一人は事故死、一人は事故で怪我、一人は家全焼」

「イエス」

「それ以外に好意に似た感情を受けたことがある」

「ノー」

「最後に、今烏丸には好きな人がいる」

「……それは呪いと関係ないんじゃない？」

ちっ、と悔しがるフリをする。

「いいか、俺は烏丸に幸せになってもらいたいんだ」

「……最後の質問から察するに、私と私の私が気にかけている男子が付き合えば私が幸せになれる、とでも？」

彼女が再び上目遣いで俺を見た。黒い瞳が今まで以上に俺を見る。

「まあ、それが実験」

「あなた本当に鬼畜な最低野朗ね」

「まあまあ、生まれ持った性格かね」

「答えはNO。お断りよ」

「えー！」

まあ、常識的に考えたらそうだよな、と今更冷静になってみる。

「私一人が苦しむだけならいいの、それを耐えればいいだけだから、でも他人に迷惑はかけたくない。あなたにもエゴがあるようにこれは私のエゴなの」

そういうことか、と俺は口を開く。

「なら、もしそれが相手の迷惑になり得なかったら、もしそこに呪いというものが発動しないで、烏丸が求めているような楽しい学校生活が待っているとしたら？」

「それはずるいわ、……確かめようがないもの」

「それを確かめるんだよ」

俺は手を差し出す。気持ち悪い話だが、俺はとても興奮状態にあった。ドーパミンが出まくっているのがなんとなくわかる。俺が人を幸せにする、いや、させるんだ。こんな風に学校生活を送ってみたかった。誰かの為に生きてみたかった。自分

の為だけじゃつまらない。人間はやはり誰かと繋がっていないといけないんだ。

「……随分と自分勝手ね」

彼女は呆れるように言った。

「まあ、むかついたら殴るなり煮るなり焼くなり好きなようにしていいからさ」

「それに加えてDM」

「烏丸、もう烏丸がこれ以上苦しむことなんてないだろ？」

烏丸は少し顔を上げた。しばらくして、少し顔を伏せると静かに俺の手をつかんだ。

「あなた、本当は、ただの馬鹿ね」

「ご名答」

こうして、俺と烏丸のベクトルすら定まっていないう実験が始まった。

結局、今の時点で烏丸に好きな男子がいるのかはわからず終いだった。しかし、あの反応を見る限り、気になる男子がいてもおかしくはない。それもそうだ。彼女だって一人の女の子だ。完全に恋愛という文字を頭から消すことはこの年齢にはむずかしいはずだろう。いや、そういう子もいるかもしれないけど。

登校中にそんなことを考えていると、あつという間に学校に着いた。なんだが、いつもより充実感を得ている。なぜだろうか。

「おはよう」

ちようど通りかかった烏丸に声をかける。

「…おはよう」

一つ思ったことがある。

こうして俺が挨拶をしてしまつては、彼女が好きな男子は変な勘違いをしてしまうのではないかと。

「朝から下らないことを考えているって顔ね」

「朝からどころか、毎日この顔で参つたもんですよ」

そんな冗談を交わして、俺は自転車の鍵を取るフリをして、彼女を先に行かせた。しかし、彼女との掛け合いは面白い。朝から頭が調子良い感じになった。

「おい、小見山よ。昨日は烏丸と一緒に帰つたそうじゃないか」

クラスに着くと坪内が話しかけてきた。

「んー、まあな。ちよつと刺激が欲しくて」

「マジでほどほどにしとけよ？ 怪我してからじゃ遅いからな」

「わーってるって」

そういつてとりあえず、ホームルームまで今後の実験について考えることにした。彼女にとつての幸せ、楽しみ。恐らくそれは奪われてしまったもの、人間関係。下らない呪いの噂のせいで満喫できなかった中学学園生活。せつかく、可憐な容姿を持っていてもそんな下らない噂のせいで台無しにされてしまった。つまり、彼女に手に入るはずだった彼女の青春を取り返せばいい。青春争奪戦の始まりだ。

「青春争奪戦だ！」

昼休みに烏丸を屋上前の階段に呼び出した。

「また、頭の悪そうなネーミングね」

この際名前などどうでもいい、大事なのは中身だ。

「今までの事例を考えて一つ、試してみたいことがあるんだけど……」

「今回は少し弱腰じゃない」

「まあ、あくまで俺の想定だから、そんなに強くは、ましてや強制は出来ないかなあと思つて」

「話の内容によるわね」

俺は少し呼吸を整えた。

「今までの呪いは全部、相手側からの告白で起こっている。つまり未だに烏丸からの想いの伝達からでは呪いが起きてないと言えるわけだ」

「それって、つまり私に告白しろって言っているの？」

「まあ、簡単に言えばそうですね」

思わず敬語になってしまふ。恐らく断られるだろうからな。

「答えはNO」

「やっぱりな……」

「他人には迷惑をかけたくない。もし、それが大事な人なら尚更……」

「そりやそうだよな……」

「……………」

少しの沈黙が流れる。俺も次に出す言葉がなかなかつかめずにいた。

「もし」

先に口を開いたのは烏丸のほうだった。

「もし、私が告白して、その……彼になにかあったとしたら、私は小見山君を殺す。それでもいいかしら？」

「……ん？」

あまりに唐突なので、俺は言葉を上手く飲み込めなかった。

「嫌でしょ。つまりそういうことよ」

「他人に迷惑かけたくないっていうわりには俺を殺すのか」

「もし、やるなら、の話。これで小見山君も諦めてくれるかなって思っただけ」

「まあ……」

別に俺に輝かしい未来があるわけでもない。ここで賭けてもみてもいいかもしれない、という考えは少しばかりあった。両親はちゃんと悲しんでくれるかな、こんな馬鹿息子でも。坪内や斉藤も俺がちゃんと成仏できるように願ってくれるかな。そんな余計なことまでつい考えてしまう。

「俺は別にいいけどな」

「……なんで？」

烏丸が顔を伏せて言った。

「なんでって……」

「なんでそんなに私に関わろうとするの？」

「言っただろ？ 興味本位だって」

「あなたを殺すって言ったのよ？」

「あんま痛くしなければいいかなあって」

「だから、それがなんでなのか、私にはわからない」

珍しく声を荒くしている烏丸がそこにいた。こんな烏丸を見るのは初めてだった。「俺はなにより、こんなわけのわからない噂で苦しんでいる烏丸よりは充分幸せだったし、他人を幸せにしようっていうには、そのくらいの覚悟は必要かなって思っただけ」

「……おかしいわよ、そんなの。なんで……、そんなに他人に尽くせるの？ もつと自分の為に生きなさいよ」

随分なことを言ってくれる。

「昨日も言ったけど、一人で生きていたって楽しくないだろ？ 今、ある意味、俺は烏丸を必要としているんだ」

「……私を必要？」

烏丸が少し驚いた顔で俺を見る。昨日から彼女はいろいろな表情を見せてくれる。それはとても人間らしく、それでもどこか人間性が欠けていて、とても不安定なものだった。そう感じた。

「だから、もし、俺の考えた事案のせいで誰かが苦しむことになって、それで烏丸が苦しむことになったら、その全てを俺が受け止めるくらいの責任はある。つまりそういうこと」

「……」

烏丸が黙ってしまった。

「まあ無理にとは言わないよ、烏丸には烏丸の幸福論があるわけだし、このままでもいいっていうんなら俺はこのまま傍観するだけ」

「……いいわけ、ないじゃない」

「可能性は無限大。好きにすればいいよ。俺はただその応援役。今まで大変だったんだ。こういうのの一つや二つあっても悪くはないだろ？」

「……あなた、本当に気持ち悪いわね」

烏丸は微笑みながら毒を吐いた。

「多分、よく思われてるだろうな、って思う」

俺は少し自虐的に笑ってみる。

「わかった。でもすぐに答えは出せないから、少し考えてみる」
「ああ、これ、俺のメールアドレスだから、いつでもメールして」

そういつてホームルーム中に用意しておいたノートの切れ端を烏丸に渡した。

「ありがとう、って言う言葉は似合わないわね」

「確かに」

「でも他に言い方がないから、ありがとう」

烏丸はその切れ端をスカートのポケットに入れた。

「んじや、いつでもメール待ってるから」

そういつて俺は先にそそくさと階段を下りていった。あとは彼女の決めることだ。その答えが出るまで俺は暇つぶしでもしていよう。

*

放課後、俺はいつもどおりゲーセンに来ていた。今日は客が少ない。乱入者が入ってくることなくコンピュータ戦を二週したあたりで、俺の携帯が鳴った。

未登録のアドレス。恐らく烏丸からのメールだろう。

『烏丸です。他人に迷惑をかけるが怖くて、ずっと目を背けてきたけれど、私は私の想いを伝えるべきかどうかまだ答えが見出せません。もう少し考えてからまたメ

ールします』

うん、それがいい、と思い、俺は再び百円を入れ、コンピュータと戦い始めた。

「烏丸に告白されて断るやつとかいるのかね」

思わず呟いてしまう。烏丸は可愛い。口が悪いのは俺の態度も悪いからであろう。自覚済みだ。どんな相手か知らないが、俺は静かに烏丸の答えを待った。

そしてその二日後の夜、烏丸からメールが届く。

『やってみようと思う』

断固たる決意に充分なメールだった。

『やり方は任せる』

俺もこの一文で充分だろうと、それだけ送った。そして、その翌日、俺が学校に登校してみると、烏丸は自分の席でなにか落ち着かない様子でいた。それはまさに学校生活でよくみる恋する乙女のように思わず、俺はほほえましくなった。

「烏丸あ、てめ、なにキョドってんだよお！」

めんどろな奴に目をつけられた。例の女番町の高居が烏丸に因縁をふっかけている。

「きもいんだよ！」

高居が椅子を蹴り飛ばす。何かイヤなことでもあったのか。八つ当たりで烏丸に当たるとは……。

「朝からうっせえぞ」

俺は席を立って、高居の前に立ちはだかった。今まで黙っていた俺の突然の行動に高居は不意をつかれたのか、一步足を引いた。烏丸も少し驚いた様子で俺を見ているのがわかる。

「八つ当たりするなら自販機にでも当たってるよ、当たり所良ければ、ジュース出てくるかもよ」

「はあ、意味わかんねーし！ ばーか！」

高居はそう幼稚染みたセリフを言って、烏丸の席から離れていった。

「あ、ありがとう」

烏丸が素直に礼を言っていた。今までのように俺を馬鹿にしている様子はない。

「んー、まあこれも計画の一つってことで、んじゃ」

俺はさっさと席にもどる。

「お前、烏丸に惚れた？」

「……まさか！」

昼休み時間に斉藤に問い詰められたが、俺が烏丸に好意を抱いていないことを彼に伝えた。しかし彼も「そんなこと言っちゃって！」と無駄に盛り上げようとするので、收拾がつかなくなる前に、彼の弁当に入っていたからあげを二つばかり平らげてやった。

「……俺がお前を呪ってやる！」

そんな斉藤のあほらしさが俺の笑いを誘った。

その日の放課後、烏丸は一人の男子生徒を人通りの少ない渡り廊下に呼んでいた。俺は現場にいると悪いと想い、屋上前の階段で結果報告待ちだった。しかし、下校時間から一時間過ぎた学校は吹奏楽の音を覗けば静かなものである。そのうち吹奏楽部もいなくなつて静寂に包まれたら、ここは恐怖のたまり場にもなりうる。学校は不思議な空間だった。

しばらくして、階段を上ってくる音が聞こえる。一步一步、ゆっくりと。

烏丸からして、階段の上るスピードでのテンションの高い低いは判断できない。俺はただ、彼女がここまで来るのをじっと待った。そのうち、彼女が姿を現す。

「お疲れ様」

「ええ、本当に疲れたわ」

彼女は体に溜まっていた空気を抜くようにため息をついた。

「それじゃ、聞こうか」

「……ええ」

*

「烏丸さん……、僕に用事って」

放課後、渡り廊下に現れたのは、一つとなりのクラスの男子生徒、村上豊だった。

少し幼いような顔をしているが、スポーツ万能で勉強のほうでもなかなかの成績を収めている。出来杉君とも一部では呼ばれている、まさに天才タイプの男子生徒だった。

「ごめんなさい。時間を取ってしまった」

烏丸は前で手を組み、必死に恥ずかしさを隠そうとしていた。

「ううん、でもうれしいよ。烏丸さんみたいなきれいな人に呼ばれて」

「あ、ありがとう……」

「う、うん」

沈黙する二人。そのお互いに夕陽の光があたり、その顔の赤さは紅潮しているのか、それともただ光が反射しているだけなのかわからない。

「あ、あのですね。迷惑な話かもしれないんですが……」
切り出したのは烏丸からだった。

「その、私と……付き合ってもらいたくないでしょうか……」

烏丸は泣きたくなるくらい恥ずかしかった。もしこれが誰か他の生徒に聞かれていたら、恥ずかしくて死んでしまいそうだった。まともに村上の顔すら見えない。見たら本当に泣いてしまいそうだ。

「ぼ、僕と……？ 僕なんかで、いいんですか？」

「そ、それは、むしろ私のほうのセリフで……」

「……烏丸さん」

「私、怖いんです」

「……噂のこと、ですか？」

村上のその言葉を聞いたとき、烏丸の胸に痛みが走る。

「私、村上君のことが好きです、でも、もし、私のせいで村上君のことを傷つけてしまったら、私……」

「……大丈夫ですよ、きつと」

村上是少しずつ歩を進め、烏丸に近づいた。

「僕、とてもうれしいです。烏丸さん、とても綺麗だし、それに僕なんかよりも頭が良くて、僕と釣り合わないくらい」

「そ、そんなこと……ないです」

そして優しく烏丸の手を握る。

「こんな僕でよかったら、よろしくおねがいます」

烏丸は顔を見上げ、村上の顔を見た。そして、烏丸は久々に自分でも忘れてたような優しい笑顔を彼に見せた。

*

「結果から言うത്?」

俺が烏丸に尋ねると、烏丸は少し顔を赤くした。

「成功、と」

俺は答えを聞く前に答えを当てた。でもその烏丸の顔には少し曇りもあった。

「その次に言いたいこともわかる。これでどうなるか、だろう」

烏丸は小さく頷いた。

「確かに、むやみに大丈夫とはいえないな。俺の命も関わってるわけだし」

烏丸は動かない。それを俺は横目で見ていた。せつかく、想いが伝わったのにこれじゃあ意味が無い。俺は奥歯をかみ締める。

「烏丸、不安になったら、その村上でもいい、怖かったら俺でもいい、いつでも連絡するんだ」

「……わかった」

既にもう恐怖に似た感情が表れている。俺はどうしたらいいものかと悩む。

理論的には今までの三回、相手からの告白でその相手は呪いという不明な力によって、無理やり烏丸から切り離されている。しかし今回は烏丸からの告白だ。これはどうなるかわからない。確率としては前者よりも低いと考えられる。しかし、もちろんそれでゼロになるわけではない。

人間の心理的に考えてみる。まず、一人目、告白して断られその後、事故で死亡。

考え方によつちや、ふられたことにより、失望感で精神的に不安定になり、そこで不慮の事故に合う。二人目、からかつて告白、ほかの生徒から逃げようとして足を滑らせ、転倒。三人目に至つても、精神的な高揚からほかのことが疎かになり、例の一つとして風呂の火をつけっぱなしにしてしまい、火災が発生。どれも推測の話だが、有り得ないことではない。それがたまたま連鎖しただけで、呪いという言葉をかければそれはもう彼女のように対人に対して億劫になるのもわからなくもない。そんなことを考えていたら、太陽が沈みかけていた。烏丸も動かないで何かを考えているようだ。

「烏丸」

「……」

俺の呼びかけに彼女は顔を上げた。

「ゲーセン行くぞ」

ゲーセンに着き、それぞれの席に座る。

「今のお前なら勝てそうだな」

冗談を言ってみるも、彼女はつくり笑いを浮かべただけだった。

村上を尾けるべきだったか、などと考えてみるが、それにも限界がある。なんだか、彼女の不安な気持ちに俺にも流れ込んでくるようだった。

結局、試合は俺のストレート負け。なんだかんだゲームをすれば強い。

「お前は強いよ」

烏丸との別れ際にそう一言言った。

彼女は小さく「ありがとう」と言っ、不安そうに家へと帰っていった。その後ろ姿を見て、俺は万が一のために心の準備を始めた。

もし、村上に何かあれば、これは俺の責任である。彼女の前から消えるべきだ。いや、その前に彼女が消えてしまいかもしれない。今回は彼女の想い人だ。彼女への精神的ダメージが大きい。俺ももう少し考えておけばよかった。ただ、彼女に幸せになってもらいたいが為、少しばかり盲目になっていたかもしれない。まあ今更後悔しても遅いのだが。しかし、これで確実に流れが生まれる。それはとても大きく、津波のようでもあり、それがプラスに働くのか、マイナスに働くのか、全てはそこで分かれる。

俺は自宅に帰り、部屋にもどる。ゴミ箱には前に捨てた卒業文集。『誰か一人がこの世界を素晴らしいものだと思えたら、きつと他の人も、そうかもしれないと思

えるようになると思います。』その言葉を思い出す。

彼女が幸せになり、世界が素晴らしいものだと思ってくれれば、俺も少しはこの世界が素晴らしいもののように見えるのだろうか。今の俺にとってこの世界はとても不安定で、とても醜くて、とても素晴らしいものはかけ離れているように思える。恐らくそれは多くの人間も思っていることだろう。

しかし、それが変わるのだろうか。そして、世界が変われば、俺も変わることが出来るのだろうか。頭にいろいろな疑問が浮かんでくる。いや、今はまず村上の安否が第一だ。俺は烏丸に幸せになってももらいたい。

なんでだ？

なんで俺はこんなに一生懸命に彼女を幸せにしようとしているのだ。

彼女がとても理不尽な日々を過ごしてきたから。

そんな彼女を幸せにすれば、俺も幸せな気分になれるかもしれないから。

俺が彼女のことを好きだから？

まさか。

俺は呪いでなにか不幸でも訪れるのかね。まあ、まだ言葉にしてないから大丈夫だろう。まさか、これ、殺されオチとかじゃないよな。ベッドでゴロゴロと考える。いや、まあ嫌いじゃないよ。嫌いじゃない。確かに可愛いし、なんか言葉も乱暴だけど、筋が通っているというか。人間らしいというか。そんな彼女を見ていると助けたくなるのだ。恋愛感情とは違う。

しかし、最近の奴は男と女がいるだけで男女の関係という早合点が過ぎるだろ。男女にだって友情はある。俺はそれも証明してやる。下半身でしかものを考えられない奴らには理解できないだろうな。まあそいつはそいつら同士で勝手に幸せになっただけいい。

烏丸は違う。

勝手なイメージだが。

違うと思う。

だからこそ、烏丸を応援したくなる。

だからこそ、幸せにしてやりたくなる。

ただ、それだけだ。

ただ、それだけ。

翌日、村上が学校から消えた、などという類の話はなく、彼は普通にいつもどおり登校し、烏丸は心底安心した様子で、昼休みには村上と楽しそうに、とても幸せそうに会話をしていた。

*

烏丸が村上に告白した日から一週間が経った。彼女は前に比べてよく笑うようになった。なぜか高居に目をつけられるようなこともなくなり、昼休みになれば、隣のクラスに行って村上を誘って昼食を取っていた。

告白の翌日の彼女は俺に何度も何度も「ありがとう」を繰り返していた。

「私、一人じゃ、勇気が出なかった」

烏丸の幸せそうな顔を見て、俺は安堵した。

「ねえ、烏丸」

「ん？」

「この世界は素晴らしいと思う？」

「……」

唐突すぎたか、と俺は思った。五秒くらいの沈黙の後、彼女は口を開いた。

「あなたみたいに人のために一生懸命になって考えてくれる人がいるこの世界は、とても素晴らしいものだとは思うよ」

彼女の答えだった。それは俺の求めていた答えでもあった。そして、彼女と別れ、一人で帰路に着く。

しかし、奇妙だった。

その言葉を聞いても俺は、この世界を素晴らしいものだと思えなかった。

『見返りが欲しいんだろ』

どこかで声がした。

「あほらし……」

俺はそう呟いてどこからか聞こえたささやきを一蹴した。

なぜだろう。意識すればするほど世界は汚れて見えた。数週間前まで見ていた世

界とはまるで違う。俺がいて、坪内たちがいて、烏丸がいて。学校が終わればゲーセンに行つて、あわよくば、烏丸と対戦して。過去は美化されると聞いたが、それを実感したのは初めてだった。

格ゲーをしていて、一つ分かったことがあった。俺は一人だった。相手はコンピユーターで勝つても負けても感情はない。それが当たり前だったはずが、今ではそれがとても不自然だった。なぜだろう。烏丸と関わったから。

確かに、あれだけ人のために頑張ろうと思つたのは初めてだったかもしれない。力を入れすぎた。他人に干渉しすぎた。考えは次々に出てくるが、肝心な答えはわからなかった。

「俺は烏丸が好きだった？」

風呂でぼつりと呟く。だとすれば今あるこの感情はその呪いのせい？

このよくわからない気持ちがあつて過去の三人は……。

「まさか……ね」

俺は一人で苦笑した。

期間も短かつたし、俺がやったこととすれば、唆して告白させたくらいだ。その程度だ。

いや、だからなんだというんだ。

「あほらし……」

まるで世界がループしているようだった。

「おいー、小見山。お前、最近、調子悪い感じ？」

翌日に学校で、斉藤が声をかけてきた。

「知っているか？ 烏丸、彼氏出来たらしいじゃん」

「知っているよ」

「なんだよ、もしかしてジェラスイですかね、アニキ」

「あー？ ちげーよ。俺はもつとあれだ。もつと素敵な子が好きだもん」

少しはぐらかしてみる。が、斉藤はただニヤニヤしているだけだった。

友達と会話するときも心のモヤモヤは晴れてくれなかった。なんなんだ、この気持ちちは。俺の世界はどうなってしまったんだ。俺は自分の世界を壊したくなった。

まずい。厨二病の始まりかもしれない。あれか、剣でも振り回して旅に出たくなっちゃうのか。エターナルアイスとかいう便利な氷とか探しちゃうのか。

あほらしい想像はやめて、勉強に専念してみる。集中すれば簡単なもんだ。本気出せばテストなんてちよろいちよろい。ただ、今までは勉強が嫌いだっただけ。ふと、烏丸のほうを見る。烏丸もちょうどこつちを向いて、目が合い、彼女は小さく手を振った。俺も少し微笑みかけて、再び黒板に視線を戻した。烏丸が楽しそうにしていると俺はただうれしかった。しかし、そこに恋愛感情というものは微塵ほどもなかったのは確かなはずだった。

「あなた、人間らしくなった」

別の日、烏丸が屋上にやってきて一緒に昼ごはんを食べた。村上は委員会で忙しいそうだ。そんな中、烏丸がそう言った。

「……誰が？」

「あなたが」

「はははははは！」

笑い飛ばしてやった。

「俺を宇宙人だと思っていたか！」

「いや、そうじゃなくて」

彼女は呆れながらも笑顔を見せる。

「前はほんとに、ただの鬼畜な変態だったけど、今は心を持ったロボット、というか……」

「アイルビーバーツクってか？ てかそれまだ人間じゃない」

「ちよつと言葉足らずだったかもしれないね」

彼女は楽しそうに言う。

「俺から言えば、烏丸、お前だって感情豊かになってるぞ」

そういうと彼女は照れたように見せる。

「確かに、それは親にも言われた……、多分あの日から私の世界が変わったんだと思う。人を好きになっても大丈夫、好かれても誰も傷つかない。それが分かったらなんか心の霧が晴れたのよ」

なるほど、それが俺の心に流れこんだのか。

「ふーん……。まあ、よかったじゃないの」

俺がそういうと彼女は「うん」と微笑んだ。

なにも不服はない。

客観的に見れば俺も幸せだ。

しかし、なんなのだろう、この心のモヤモヤは。

「小見山君、ですか？」

ある日、声をかけられた。見覚えのない顔。誰だろうか。

「隣のクラスの村上です。烏丸さんの、その……」

「そこまで言えばわかるよ」

俺は笑ってそう言った。

「それでお礼を言いたくて……」

彼はそう言った。俺は彼のためになにかをしたかどうか。いや、していない。

「それは俺にいうべきじゃないと思うぞ。その気持ちを烏丸にでも向けてやれよ」

俺は冷たくそう言った。俺と彼には面識がない。面識がないのにいきなり礼を言われるのは気持ちが悪いものだ。

「それじゃ」

そう言って、村上を背に、俺は自分のクラスへと足を進めた。

烏丸の呪いが自分に移った？ 俺に告白してきた女子は呪いを受ける？ まあ俺に告白する女子生徒なんかこの学校にいやしない。俺は伸びをしてつまらない日常にもどってしまったクラスを視線で見回す。

次の楽しいことでも見つければいいのかね。

俺はシャーペンをぐるりと回した。

「小見山君！」

休憩時間に廊下にあるロッカーで教科書を出し入れしているときに、烏丸が話しかけてきた。

「おー、どうした」

声をかけられるのは悪くない。

「あ、あの、少しいいかな」

「……いいけど？」

烏丸の様子が変なのは一目瞭然だった。村上と痴話喧嘩でもしたのだろうか。

少し離れた廊下の踊り場に出る。彼女は少しためらったあとに顔を上げて、口を開いた。

「こういう言い方はなんだと思うんだけど、その……改めて、お礼がしたくて」

「お礼？」

「そう、お礼」

「俺、なんかやったっけ？」

対したことはしていない。こっちが勝手に実験をして、その答えを得ただけ、それ以上でもそれ以下でもない。つまり、彼女にお礼されるというのはお門違いということだ。

「私の……、後押しをしてくれた」

「……」

「一歩踏み出せって、そして私は一歩前に進んだ」

「……」

「そしたら、その一歩はものすごく大きな一歩になった」

「……」

俺はそんなことをしていない。そう言葉にせず、表情で彼女に伝えた。しかし、それは伝わる様子がなかったので俺は口を開く。

「違う。俺はただ自分の興味でやっただけ、そこで烏丸が一歩前に進めたのは、そ

れは君自身の力だろうか？」

少しの沈黙、今度は彼女が言葉なく、そうじゃない、けど言葉にできない、という表情をしていた。俺は少し考える。他人の幸せは他人の協力無しには達しない？もし、彼女がその他人だとすれば、彼女が俺を幸せにしてくれるのだろうか。いや、他力本願はいけない。そもそもそれ自体が破滅の種だ。でも人は一人では生きていけない。ならばどうする。この状況で俺も彼女も納得がいく答え。

「そうだな」

俺は窓から外を見る。木々が生えそろう学校裏の森は、風に揺られざわざわと葉が揺れていた。

「それじゃ、俺とずっと友達でいてくれる？　そうしてもらえただけで、俺は充分だよ」

俺はそう言って、再び、彼女の前に手を差し出した。

「……………」

彼女は少し、納得できないような顔をしていたが、俺の顔を見て、なんらかの變化が起きたのか、「わかった」と笑って俺の手をつかんだ。

「一つ条件がある」

俺は思いついたので言ってみた。

「なに？」

「俺のこと、好きになるなよ！」

「ならないわよ。あなたみたいな変人さん」

綺麗な笑顔、それに似合わない厳しい即答だったので、俺は心の端でへこんではみたものの、多分、これが今の俺にとって正しい答えだったのだろうと、変に納得してしまった。

「独占欲とかじゃないんだろうな」

ぽつりと呟いて、彼女が振り返った。

「なにが？」

「いや、なんでもない」

そう、独占欲ではない。ただ、好きになってしまったかもしれない女の子の幸せそうな顔を見ているだけで、俺は楽しかったのだろう。そう考えれば納得がいく。我ながら鈍感というか、答えにたどり着くまで随分と遠回りしたようなもんだ。

つまり、今彼女は楽しい学校生活を送ろうとしている。俺はただ、それを傍観しているだけで満足なのだ。確かに俺は変人さんだ。と思わず口が緩んでしまう。

『誰か一人がこの世界を素晴らしいものだと思えたら、きっと他の人も、そうかも
しれないと思えるようになると思います。』

そうなのかもしれないな。俺は彼女が幸せになる、ということに希望を持てる。
彼女が幸せであるのなら、それは俺の幸せ。苦しいときはそのときに必要な人間が
助ければいい。誰もいなかったら、俺が助ければいい。それだけのこと。

つまりあれは究極的自己満足の思想の文句として考えても良くて、結局は子供の
導き出したアホな言葉紡ぎだということだったのだ。

「烏丸！」

先を歩く彼女は髪を揺らして振り返る。

「人生はゲームみたいなんだ。楽しく行こうぜ」

2. 色違いの彼女

理由なんてなかった、といえは嘘になるのである。

大学に入った俺は、絵を描くサークルに入ろうと決めていた。絵を描くのが好きだったし、それを他人に見て評価されることを望んだからだ。

その大学には二つのサークルがあった。思ったよりも少ないものだ、と思ったものだ。

ひとつはイラストレーションサークル（以下IC）、今時っぽい感じのイラストで飾られ、中には漫画を描いたりしているものもいるという。

もうひとつは美術サークル。こちらはICと違い、古風で物静かなイメージがあった。

勧誘においても、ICは活動的で必死に新規会員を募集していたが、美術サークルにおいては物静かに本を読んでいたくらいだ。

何かにチャレンジしたいという欲望に駆られる大学生活第一歩にするには美術サークルは少しばかり退屈すぎた。

そして、俺は会員名に『奏上孝太』と書き、ICに入ることにしたのだった。

数ヶ月が経った。

少し違和感があったが、ICには数種類の人間がいた。

まじめに絵を描くもの、適当に描いては誰かに見せたがるもの、そういった絵や、ネットに流れている絵をひたすら見ているもの、そして、絵すら描かないで、ひたすら漫画やゲームの話をしているもの。

正直、このサークルがなにをするサークルなのかもわからなくなった。

週末には飲み会、これといって個展やイベントに参加するわけでもなく、ただただ自己満足の輪の中でそいつらは生きていた。

俺はそんなものを求めてはいなかった。

しかし、だ。

そのサークルには花穂という、かわいい女の子がいた。正直言うところちょっと好きだった。

あわよくば、なんてことも考えたりもした。

こうして、俺はズルズルとこのサークルに入り浸るようになり、絵なんてものは落書き程度すらしか描かなくなっていた。

ある日、俺はいつもどおり、大学を歩いていた。

体はすでにIC色に染まっっていて、知り合いも増えた。

なんとなく、俺が求めているものとは少し違う気がしたが、俺は今の生活にある程度の満足感を得ていた。それでいいのだ、と。

そんな時、C棟の前を通ったとき、一つの看板が目にとまった。

『東多摩大学、美術展覧会 3F』

美術サークル主催の展覧会だそうだ。

なんとなく、地味で嫌煙していた美術サークルだったが、その実力を確かめてみるのも悪くない、と俺はなにも考えずになんとなく、C棟に入り、展覧会が行われている3Fへ向かった。

*

入り口についたときに、会員が一人、いすに座って本を読んでいた。こいつには見覚えがある、勧誘していたときにすら本を読んでいた女の子だ。

そいつが俺に気がつくのと、小さく「どうぞ」と言って、静かな笑顔で入り口を案内した。

俺はそのまま会場に入る。

会場といっても、クラスに絵を飾ってそれっぽくしてあるだけだが、それでもなかなかの量の絵があった。

中にはいすに座っている会員と思われる人たちが計3名。

今確認できた、男女の比率は1:3、男にとってはハーレムのような状態だが、いかんせん地味な女の子だったのでそこまでうらやましさを感じなかった。

それはともかく、俺は絵を見始める。

人物別で順番に並べてあるらしく、最初の作者の名前は曾根山美月。絵としてはいまいち面白みに描ける風景画で、正直高校生レベルと言ってもいいくらいだ。

俺は歩く速度でその子の数枚の絵を見て歩き、次のコーナーに入る。

次は伊達国光、唯一の男会員の登場である。

確かに力強さは感じるが今一出しきれてない感じがする。俺だったらこの影もつとこう強くする、という部分がやたら多いのだ。

そして、この男、量が多い。十枚ほど飾られてあり、ほとんどが人物や石膏画、人を描くのが好きなのだろう。

まあ、こんなものか、と次の絵を見た瞬間、俺の思考は一瞬止まった。

なんだ、これは。

出てきた言葉がそれだった。

その絵は、なんともいえない独特な雰囲気を持つ油絵で、黄色を基調とした人物画だった。

しかし、色使いが何とも言えない。ここでこれを塗るか、という悪く言えば意味不明なセンス、よく言えば芸術的ともいえるが、評価する人間はまったく持って二手に分かれるであろう。ただ、そういう絵がある、といって流されるような代物ではない。事実、うっかり俺も脚を止め、その絵を見入ってしまった。

「あ、あの……」

近くに座っていた女の子が俺に話しかけてきた。なにか自信がなさそうで、存在を否定してしまえば、すぐに消えてしまいたいような、そんな女の子だった。

「よ、よかったら、その、この……」

と言いながら、ポストカードを一枚差し出している。そのポストカードには今日の前にある絵が描かれていた。

「これ、君が描いたんですか？」

「は、はいっ！」

顔がどんどん赤くなっているのがわかる。

「なんていうか、独創的というか……。これ、もらっていいんですか？」

俺はポストカードを指してたずねた。

「は、はい、よかったら、どうぞ」

ポストカードを受け取り、裏面を見ると、『楽しく絵を描こう！ 三田美鈴』と手書きで描いてあった。

それを見て、思わずにやける。

「これ、面白いですね」

「あ、これは、その、会員のそれぞれのメッセージなんです。や、やっぱりほら、

絵は楽しく描かないと面白くないじゃないですか！」

なんだか、弱弱しかった彼女に少し火が灯るのが見えた。

そんな彼女を見て、余計にほほえましくなる。しかし、改めて絵を見ると、こな子がこんなに大胆な絵を描くなんて、なかなか信じがたい、と改めて思う。

「ほかの人に悪いけど、この絵、なんか惹きつけられたんで、つい、足が止まっちゃいました」

「そ、そうなんですか。ありがとうございます！」

彼女はともうれしそうに笑っている。その笑顔が素朴であり、なにより、自分の絵が評価されて素直にうれしい、と物語っているのを見て、俺は不思議とその子を抱きしめたくなるような、そんな気持ちに駆られた。

「ほ、ほかの絵はないんですかね？」

少しごまかすように俺がそう言うと彼女は焦った様子を見せる。

「わ、私まだ一年なんで、あまり描けてないんです」

「そっか、それならしょうがないな。一年か、俺と同じなんだな」ともう一度、改めて絵を見る。

「また美術展やるんだったら、見に来るよ」

「ありがとうございます！」

そんなやり取りをして、俺はそのコーナーから離れた。

三田美鈴か。ちよつと可愛かったな、なんて思いながら最後のコーナーに入る。どうにも先ほどの三田のインパクトが強すぎたせいで、申し訳ないが、ものすごく絵として弱く見える。俺は適当に見流した後、その展覧会を後にした。

そして、階段を下りている最中に一枚のポストカードを大事にしまった。

それから、ICにたどり着いたのだが、不思議と違和感があった。

俺は何をしたくてサークルに入ったのか。

お酒を飲みたいから、違う。適当な絵を描きたいから、違う。漫画やゲームの話をしたから、違う。

俺は自分の絵を描いて、それで他人に評価されたいがためにこういったサークルに入ったはずだった。

でもここはやはり違った。

簡単に言えば、先ほどの美術サークルに感化されたのである。

今、自分のいる環境がとても幼稚で、うそ臭く見え始めてしまった。今思えば、

このサークルはとても楽しそうにしているが、なんて退屈なサークルなのだ、と感じるほどだ。

それほど、三田美鈴の描いた絵には俺の何かを変えさせるほどの力があつた。俺もああいう絵を描きたい。

そして誰かに見てもらい、評価されたい。

今までぼやけていた何かがはつきりとしたとき、俺はICをやめていた。

*

かと言って、翌日にさっそく美術サークルに入れば、なにか不思議に思われそうなのがした。

居場所をなくした俺はとりあえず、飲み物を買うために購買へと向かった。

「この購買、スケッチブックもあるのか……」

とついつい買ってしまったスケッチブックとコーヒーを持ち、構内のベンチに座った。

「あ、鉛筆なかったな」

なんてぼやきながら、ペンケースからシャープペンを出す。

おとし、高校時代に描いた、石膏画を思い出しながら絵を描き始める。
不思議と懐かしい感じがした。

「こ、こんにちは」

俺が不明瞭な輪郭を書き終えたときに声があった。

スケッチブックから顔を上げてみると見覚えのある、三田美鈴の顔。

「つくりした！」

驚いて、「び」が消えるほどびくっとしてしまった。

「す、すいません、ごめんなさい」

彼女も慌てて必死に謝る。

「ふう、こんにちは、これから絵描きに行くの？」

「は、はい！ なんとなく、顔を覚えていて、スケッチブックを持っていたので、ちよつと話しかけてみちやいました……」

そのあとにごめんなさい、と付け足しそうな申し訳ない顔で俺を見ている。

「いいよ、気にしなくて」

「そ、それで……」

「ん？」

「なんの絵を描いていたんですか？」

「あ、ああ、高校の時に描いた石膏画を思い出して描きしてた」

「見ていいですか？」

興味津々に彼女が言う。

「今、描き始めたばっかだから、ほとんど描けてないぞ」

それを聞いた彼女はすこしがっかりしている。なんだか行動が素直に現れていて、見ている飽きない。

「あ、あのよかったら、う、うちのサークルと一緒に描きませんか？」

まさかの彼女からのお誘いで、俺は変な顔をしたせいかな、彼女は慌てた。

「あ、ごめんごめん、いや、実はさ、ちょっと興味持ったんだよね、美術サークル。

最初はなんか地味そうだったからついついICに入っちゃったけど」

「ICの方たちはにぎやかそうですからね」

少し困った顔で三田は言った。

「でも、逆に退屈だったよ、いろんな意味で。それで、美術サークルに行こうかなあつて思ってたんだけど」

「そうなんですか？」

三田の表情が明るくなる。

「きっかけがなくなつてさ。んで、今ちようど誘われたから、その……いこうかなあつて」

言い終える前に三田は満面の笑みになっていた。

「じゃあ、私たちもう仲間ですね！」

「な、仲間？」

変なやつだった。

「行きましよう！」

でも楽しそうだった。

「ちよ、ちよつと荷物持つてくから待つてくれ！」

それ見ていると、なんだか、俺もうれしかったんだ。

そして、俺は美術サークルの一員になった。

*

「三田よ、それにしてもお前、ほんとに不思議な色使うよな」

「そ、そうですか？」

俺が美術サークルに入って数日、俺と三田は同じ年ということもあってすぐに仲良くなった。

ほかの三名は先輩で三年が二人、四年が一人でこれといって仲が悪いわけでもないが、三田も少しいづらかったようだ。

「奏上君、私の絵なんかほとんど見ないで帰っちゃうんだもん、ひどいよねー」

というのは三年の女子先輩、名前は最後見逃して覚えていなかったのがちよつとシヨックだったらしい。御影とも子、おばさんくさい名前だからもう覚えた。本人には秘密だが。

「私、とも子先輩の絵すきですよー」

三田が間髪なくフオローを入れる。

「ほんとに、美鈴ちゃんは素晴らしいわね、よしよし」

そういってとも子に頭をなでられる。

撫でられ終わった三田はキャンパスに向きを戻し、赤い色をぺたぺたと塗り始め

た。

「そこに赤をのせるか、うーむ」

俺が改めてそれに近づく。一体、なにが彼女をそうさせるのか。

「きつとね、私と奏上君とは見える世界が違うんだよ」

その言葉は、正直いうとなんとなく受け入れがたく、そしてなんとなく嫌な感じがした。きつとそれが顔に出てたのだろう、三田は必死に言葉を足した。

「私ね、ちよつと見える色が人と違うんだ、昔から」

「え？」

一度辺りを見回したら、会員たちはみんな苦笑いやつらそうな顔をしている。

「なんだそれ、色盲とかなのか？」

「まあ、そうなるのか、な。先天性の二色型っていうんだけど、色がね、ちよつと足りないんだ、私の世界」

正直、衝撃だった。

言葉が出なかった。

何かを言えば、彼女を傷つけそうな気がした。それでも彼女は必死に笑顔でぺたと油絵を塗っていた。

『楽しく絵を描こう！』

その言葉が俺の脳裏によみがえり、俺は自然と流れようとする涙を必死にこらえていた。

彼女はなぜここまで健気なのか。たとえ先天性でもここまで自分を保ち、絵を描き続けるなんて。

「三田」

俺は一息ついてから、彼女の名前を呼んだ。

「なあに？」

「お前、すごいやつだよ」

そういうと不思議そうに俺の顔を見て、また笑った。

「そうかなー、えへへ」

*

一カ月後、三田の作品と、俺の作品が新たに一つずつ出来上がり、再び展覧会を行うことになった。

先輩たちも数枚作品が完成してる。

このサークルでは多いときは月一回でこういった展覧会を開いているそうだ。目的はモチベーションの向上だというが、まったく持って間違っていないと俺は思った。

そして展覧会の日。

相変わらず、来客が少ない中、俺はスケッチブックに適当に落書きをしながら時間をつぶしていた。

「ちーっす！」

なんだか、聞き覚えのある声だと思ったら、ICにいたときのやつ、数人が入り口に立っていた。名前はすでに覚えていない。

美術サークルの戸惑いの表情を見るからにあいつらはこの美術サークルに部屋に向いていない。

「へえ、すげー、みんななかなか上手じゃん！」

ICのやつらはそういういながら順に見ている。並びは前回と同じで、俺は伊達先輩と三田の間に座っている。

伊達先輩の絵の前で、ICのやつらは、へえーやるなあ、などと言いながら上か

ら目線でお互いの評価をして歩いていく。

「ひさしぶりじゃん、どうこっちの環境」

「なかなか、楽しんでるよ」

俺はそう力ない返事をした。どうせ、こいつらは俺の絵を見下しながら見ているに決まっている。頭の中には超有名作家の絵とうんちくしか入ってないやつらだ、こいつらから見て俺の絵は所詮素人の絵だ、というレベルで終わっている。

早く帰ってくれ。

俺は切にそう願った。

「うおー！　なんだこの絵！」

それと一緒に沸きあがる笑い声。

「すげー色使い。なんで人間の肌が赤いんだよ、飲んだくれの絵かー」

あいつらは作者がすぐ横にいることに気づいていないようだった。というのも、三田は外にいても子先輩のコーナーも兼任しているので、少し離れた場所に座っているのだ。

三田は複雑な表情で下を見ていた。

クソ、早く帰ってくれよ！

「なんか天才きどつてるよね、この絵」

「うん、でも全然駄目、まじ意味不明だし」

「才能ないよねー」

散々言いたい放題だ。

いいから帰ってくれ！ 俺はそう叫びたかった。拳に力が入り、今すぐに殴り飛ばしてしまいたいそうだった。

それでも三田はまだなんとか作り笑顔を保っている。

俺はそれが心苦しくて、つらかった。声が出ないなら、俺が大声で叫んでやりたかった。

「まあ、こんなもんだよなー」

最後にそう吐いて、嘲笑した顔を見たとき、俺の体は勝手に動いた。

「てめえら！！ いいかげんに……っ！！」

「ありがとうございます」

三田は笑顔だった。

「また、次、がんばって描きますので、また来てください」
声は震えていた。

でも涙は流れていなかった。

逆に俺が泣きそうだった。おそらく、周りの美術サークル会員もそうだったと思う。

ICのやつらもその三田の様子を見て、ぶつぶつ言いながら出て行った。それと同じくして、三田の目から、遅い涙が一粒落ちた。

「三田！」

俺は三田に駆け寄って崩れ落ちそうな三田を支えた。

「大丈夫か、気にするな、あいつらの言うことなんか」

「うん、大丈夫だよ。私、大丈夫だから」

必死に目をこすりながら、三田は俺にそう伝えた。

そして涙を拭き終わったあとにも、俺に微笑みを見せた。

あいつらの顔が浮かぶ、一発でも殴らないと気がすまない！

俺が拳を握り締めたのを見たのか、三田は俺の手をぎゅっと握った。

「駄目だよ。手痛くしたら、絵、描けなくなっちゃうよ」

「……でもっ！」

俺は歯を食いしばった。

「奏上くん」

伊達先輩が俺の肩に手を置いた。

「ああいう人だっている、僕たちはそういう覚悟を持って展覧会を開いているんだ。すべてをマイナスに捕らえることはないよ、三田さんなら、きつと次にもっと良い絵を描いてくれる、そう思わない？」

いつもの静かな伊達先輩が俺を落ち着かせるようにそう諭した。

俺は何も言えなくなつた。確かに評価をされるというのはそういうことだ。たとえば、見た人間が絵についての知識がまったくなくとも、その人からの発言はそれに対する評価なのだ。わかつていたはずなのに。それでも俺は。

「大丈夫、私、ああいうの、昔からあつたから、大丈夫」

三田がそう言って、俺をなだめようとしたのを見て、俺は喉まででかかった怒りをなんとか飲み込んだ。

そして、俺はなんとなく三田の頭をなでた。

「次も、がんばろうな」

そういうと、三田の笑顔は少しだけ、いつもの笑顔になった。

*

「三田、お前やつぱすげえよ」

その日の帰り道、大学から駅までが一緒なので、一緒に歩いて駅まで向かう。

「そんなことないよ」

照れ笑う三田。

「でもさ、あの時、奏上君が叫びだしそうなの見て、よくわかんないけど、嬉しかったんだ。私の絵に対して、批評されているときに自分の絵を批評されてるみたい怒ってくれて」

「そ、それは……」

言葉が出なくなる。あの時、俺が三田を見ていたのと同じように、三田は俺を見ていたのか。

「だからね、平気なんだ。私の絵、好きな人がいてくれるから、私、絵描き続けられるもん」

少し言葉を無くす。

「……、俺はさ、お前のあの時の絵を見て、何か変わった気がしたんだ、だから、

俺、お前の絵を馬鹿にするやつが許せなかったんだ。だから……その……」
なんとなく、三田を見る。三田はやはりいつもどおり、楽しそうに笑みを浮かべていた。

「ありがとう」

そう言うと、少し下を向いて、弱弱しく俺の左手を握った。

「ちよつと、こうしていたいな」

俺は少し驚きながらも「しようがねえなあ！」と言って、その手を握って、俺と三田は一緒に駅へと歩き続けた。

初版発行日・2011年10月30日（コミティア98）

PDF版発行日・2013年7月27日

発行者・高柳寛（KK FACTORY）

印刷所・株式会社ポプルス

表紙イラスト・高柳寛

HP・<http://kkfactory.doorblog.jp/>

ご意見・感想は [こちらまで](mailto:kurzstories@hotmail.co.jp) ・ kurzstories@hotmail.co.jp



桧瀧社 KK FACTORY

